

カントの超越論的観念論についての考察：『純粹理性批判』における認識と存在の関係

朴，修範

<https://doi.org/10.15017/1500457>

出版情報：九州大学，2014，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

論文題目 カントの超越論的観念論についての考察—『純粋理性批判』における認識と存在の関係—氏名 朴 修 範

論文内容の要旨

本論文は、カントの超越論的哲学とはどのような意味における認識論および存在論なのかについて考察し、カントの超越論的観念論の固有の意味を明らかにしようとするものである。

これまでのカント哲学に関する解釈史においては、カントの基本的立場を観念論的か実在論的かのどちらかに定位することによって明らかにしようとする傾向が一般的だった。しかしながら、本論文は観念論か実在論かという二者択一の問題としてカントの認識論を解釈しようとするのではなく、むしろ次のような問題設定を、カント哲学を考察するための出発点にしている。すなわち、そもそもカントの経験の理論とは観念論か実在論かという問い方によって解釈することが可能なのだろうか。

このような観点からカント哲学を考察する本論文は、第一部「認識と存在」と第二部「超越論的観念論と世界」の二部構成になっているが、『純粋理性批判』（以下『批判』と略記）における根本的な諸問題から認識と存在との関係を考察する第一部は以下の四つの章からなっている。

まず第一章では、従来の哲学においてスキャンダルでもあった外的対象の存在の問題について、はたしてカントの認識論はどのような答えを出しているのかを確認する。すなわち『批判』第一版の「第四パラロギスムス」と、第二版の「観念論論駁」および「序文」におけるそれへの注とを比較検討することを通して、外的対象の存在に対するカントの立場を明らかにすることを試みる。

この試みを引き受ける仕方で第二章においては、「物自体」および「触発」というカント認識論の根本的アポリアについて考察する。触発の事態とは物自体の存在を前提することだという従来の一般的な解釈の誤りを指摘しながら、観念論か実在論かという二者択一的な従来の解釈の問題設定そのものの克服を目指す。触発問題の吟味から、カントの超越論的観念論にとって、認識と存在との関係が一方を他方へ一方的に還元することによっては解決されえないことが明らかになってくる。

そこで第三章においては、認識と存在の関係の一方の極である存在そのものに焦点を合わせながら両者の関係についてさらに立ち入って考察する。『批判』全体にわたっている「存在」概念を辿り、カントの経験の理論がもつ存在論としての可能性を掘り起こす。そしてまた、現象と呼ばれる存在者が、存在そのものとは区別されることを解明することによって、認識と存在に対するカントの立場をより明確にする。

カントの「存在」概念を主題化することによって、さらに「知覚」概念の重要性が浮かび上がってくるが、第四章においてはその「知覚」概念を考察する。まず、『プロレゴメナ』における経験判断と

知覚判断を比較検討することによって、認識と知覚との差異を際立たせる。次に、従来の知覚概念が超越論的観念論においてどのように捉え直されているのかを確認する。さらには存在問題における知覚の重要な位置づけを明らかにする。

上述のように本論文の第一部は、認識と存在の関係についての考察から超越論的観念論の在り方を明らかにしようとしているが、そもそも『批判』の「超越論的感性論」と「超越論的分析論」のみを視野に収めるだけではカントの経験の理論の核心的思想を把握することは困難である。それゆえに、四章からなる第二部は、「超越論的弁証論」における「世界」概念にまで視野を広げることによって、そこでの認識と存在に対する「世界」概念の関係、および超越論的観念論そのものにとっての「世界」概念のもつ意義について解明する。

まず第五章では「超越論的客観」の概念を吟味する。「超越論的感性論」と「超越論的分析論」に限定された従来の一般的な解釈は、この「客観」を前者での超越論的客観(物自体)かあるいは後者における超越論的客観(「対象一般」)へと一方的に還元しようとした。しかし本論文は、両者におけるそれぞれの「超越論的客観」の概念のうちに多義性を見届ける。そのうえで、「超越論的感性論」における超越論的客観(物自体)の真相は「超越論的弁証論」における超越論的客観(世界理念)を踏まえてこそ明らかになってくるということを示す。

第六章は、第一章から第五章までの議論において、カントの経験の理論における認識と存在の関係に潜在的に深く関わっていた「世界」概念について、それを主題化する。従来の形而上学からおのずと生じる世界理念に対するアンチノミーに対して、カントの超越論的観念論がそれをどのようにして解決しているのかを明らかにする。それによって世界の認識および存在をめぐる従来の考え方とカントのそれとの根本的な違いがどこに存するのかも明瞭になってくる。

このように第六章は、カントが世界の存在および認識に対してどのような立場に立っているのかを明らかにしている。そのうえで第七章においては、まさにその「世界」概念がカントの経験の理論そのもののなかでどのような位置を占めているのかという問題へと立ち入ることになる。現象の認識問題および存在問題と世界とがどのように関連しているのかを解明し、超越論的観念論と世界とがどのように関係するのかを明らかにする。

さて、カントの経験の理論における「世界」概念の意義を検討することで、経験の「真理」に関する議論の解釈もまた新たな局面を見せることになる。そこで第八章においては、『純粹理性批判』における「真理」概念について考察する。カントは、真理とは認識と対象との合致だと繰り返して語っているが、真理は認識と対象との合致だという考え方はカントが自ら打ち出した考え方ではない。ところが、カントはこのような従来の一般的な真理観を自らの経験の理論において容認しているのではなく、むしろ彼の固有の真理概念を新たに打ち出していることを浮き彫りにする。

以上のように、超越論的観念論そのものの在り方に関わる諸問題について考察することによって、超越論的観念論としてのカントの経験の理論について次の二点を指摘することができる。第一に、カントの経験の理論は一般的な意味での観念論でもなければ、ましてやその対極にある实在論でもなく、むしろ観念論と实在論の間にこそ自らを据えるものである。第二に、カントの認識論は、経験の可能性を超越論的に問うことによって、その問いの出発点であった経験そのものから遠ざかってしまうのではなく、むしろ私たちの意識を乗り物にして再び経験の地盤である世界へ帰ろうとする哲学である。